

レポーター：学芸員の岩永さんです。よろしくお願いします。

学芸員：よろしくお願いします。

レポーター：岩永さん、高麗茶碗ということなのですが、高麗茶碗とはどういうものな
んですか。

学芸員：高麗というのは歴史で習っていらっしゃるかと思いますが、朝鮮半島の国の
古い名前なんです。高麗というのは15世紀くらいまでの国の名前なんですけども、
その後、朝鮮王朝に変わるんですが、その後に作られた茶碗のことも古い名前を取っ
て高麗茶碗って呼んでいます。

レポーター：じゃあ、朝鮮から日本に伝わってきた。

学芸員：はい、そうですね。

レポーター：岩永さん、高麗雨漏茶碗、という作品名なんですけども、雨漏というのは。

学芸員：面白い名前ですね。

レポーター：そうなんです。どういうところから来ているんですか。

学芸員：ちょっと作品を見ていただくと、ヒビがけっこう入っていて、こうシミがたく
さんできていますよね。

レポーター：シワといいますか、なんか模様のような。

学芸員：こうほんとおうちでどこか雨漏りがするとかいう時みたいに、水が染みてき
たようなそのままの姿をいつているんですね。ヒビが入って使っているうちに段々変
化していつて、こうなってしまったお茶碗なんです。

レポーター：ええー、じゃあ、最初に作られたときからシワやヒビがあるわけではない
んですよね。

学芸員：じゃなくて、最初は白い化粧土をかけて焼き上げていますので。

レポーター：もう最初は真っ白に、つるーんとした。

学芸員：つるーんとした、まあクリーム色くらいですかね白いきれいな土で、もちろん
ヒビもなくて、きれいなものが出来上がっている、それを使っているうちに段々少し
ずつヒビが入ってきて、中の液体とかがこう染みていつて、こういう蜘蛛の巣みたい
なこうヒビのような模様ができてきて、たくさん水が漏れてきたところにもっと茶色
い大きなシミができて、こういう風に時間をかけてできていく、成長していくとい
うか成熟していくっていうか。

レポーター：味がでる。

学芸員：味が出るっていうか、そういう感じですね。

レポーター：へえー。じゃあ、最初からそれを見越して、もう名前も付けられているん
ですよね。

学芸員：多分これは使っている内にこうなるということで、あのなんていうんでしょう、
普通西洋の食器だったりすると、もうヒビが入った時点で、壊れました、使えません

という話になると思うんですけど、千利休が作った茶の湯、特にわび茶っていうこう派手じゃないシンプルなものの中にこう美しい物を見出すっていう考え方の中には、段々そうして壊れていくような、年を経て変化していくようなものがあるんですよ、すごいキラキラな完璧な美しいものじゃなくて、不完全なものこそ、面白くないですかっていう、価値観を変えるような提案をして、こういうお茶碗が面白いですよっていう価値観でみんなが求めて、名前も雨漏って呼んだらほんとにそのままだけど楽しいねっていう形でお茶人達がつけていったってわけですね。

レポーター：すごい変化して、そのなんだろう出てくるシミシワをなんか味わうっていうか。

学芸員：そうですね。だからこう段々人間でも年を経ていい感じのおじいちゃま、おばあちゃまになっていった、そういうお姿の方がステキっていうそういう価値観ですよ。

レポーター：へえー、こちらの高麗雨漏茶碗はいつも福岡市美術館の方で見れるんですか。

学芸員：だいたい、年に一回くらいは、展示をするような機会がありますので、楽しみにしていただけたらなあと思います。